

浄土宗西山禅林寺派

# 潮音寺だより

http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/ ナモの寺 検索  
〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬一丁 10-11

第344号  
平成24年6月

電話 052-671-4831

ファックス 052-671-4856

choonji@aichi.email.ne.jp



【出典】『大無量寿経』下巻

天下和順 日月清明 風雨以時 災厲不起  
国豊民安 兵戈無用 崇徳興仁 務修礼讓

撮影：超空正道

人知を超えた  
計り知れない  
巨大地震や  
天地を揺るがす  
風雪雷雨

大いなる自然には  
ただ畏敬し  
ただ平穩を  
祈るのみ

されど  
人が為せる

争いは  
災いは  
互いの欲を慎めば  
おのずから無くなるもの

仁徳を尊び  
礼節を守り  
武力を用いず  
天下和順なれ  
人々安穩なれ

## 天下和順 てんげわじゅん

先頃五月六日に、大きな竜巻が発生しました。テレビニュースで見、改めて竜巻の怖さを思い知らされ、不安な思いをいだかれた方も私を含め多くいらしたかと存じます。東日本大震災の被害区域は、とつともなく広範囲でしたが、今回の竜巻の場合は、茨城・栃木両県のごく限られた区域にもかかわらず、その猛威は大変なもので、死傷者まで出て、住宅などの被害は二千棟以上にも及んだといえます。

竜巻の強さを示す「藤田(F)スケール」は、今回の場合、これだけの被害が出たにもかかわらず、六段階中、上から四番目のF2であったといえますから、自然の威力は、とても人知の及ぶところではありません。ひたすら平穏なるを祈り、ひとたび猛威を振るわれたら最後、

ただひれ伏すほかありません。

自然災害においては、かくもわれわれ人間は無力に等しいといえますので、自然界を征服、あるいは征圧してやろうと思つのは思い上がりも甚だしいといわねばなりません。かつての人類が抱いていた、自然を神とあがめた畏敬の念を忘れてはならないように思います。そして、もうひとつ、ことわざ(寺田寅彦の言葉とされる)に「天災は忘れた頃にやってくる」とあるように、自然災害が、そうたびたびあるわけではないということを知るべきでありましょう。

統計的に見ますと、東日本大震災の場合、死者数は行方不明者を含めて約二万八千人、阪神・淡路大震災は約六千人、伊勢湾台風は約五千人、関東大震災は、さすがに多く約十萬五千人であります。これだ

けの多くの命が一時に奪われるのですから、確かに、大変な惨事であることには違いありません。しかし、一方で、交通事故・窒息・転倒転落・溺死<sup>どき</sup>・火災・中毒といった不慮の事故死者数を調べてみましたら、毎年、実に四万人ほどもいるんですね。また、悲しいことですが、殺人による犠牲者は毎年約千人、自殺者はここ十数年来、毎年三万人を超えているという、誠に憂慮すべき事実があります。

さらに、究極の災難というべきものがあります。それは戦争です。第二次世界大戦における戦死者は、戦闘員・非戦闘員合わせて約三百万人といわれています。これは日本だけの人数で、世界全体では、その数六千万人との報告があります。ただ、このようなデータには不明瞭なところがあつて、あながち正確とはいえ

ないところもありますが、ナチスによつて処刑されたユダヤ人の総数が約五百七十万人といわれ、そこから推察するに、とんでもない数の人々が亡くなり、あるいは負傷をし、建造物等の物的損害も計り知れないものがあつたということは紛れもない事実でありましょう。そこで、強く認識しなければならぬのは、これらがすべて、天災ではなく、人為的、要因による惨事であるということ

です。つまり、当事者の意識一つでそのような惨事を回避できる可能性があつたのに、ということであり

ます。このように見てくると、人間とは、実に浅はかで罪深い存在といわねばなりません。しかし、一方で、止めども尽きぬ悲しい涙の中から、美しい布施・博愛の精神が生まれ、すばらしい文学・芸術が人を感動させ、

精神文明・物質文明両面において進歩発展を促してきたことも、否めない事実であります。

ではここで、仏教における、災難に遭つたときの対処法を考えてみることにいたしましたよつ。

釈尊という呼称は、釈迦族の尊者というのがその由来です。釈迦族は大変誇り高い部族であつたといいますが、コーサラ国によつて滅ぼされてしまふという悲しい体験を、釈尊は晩年されておられます。仏典はこんなエピソードを伝えています。

「コーサラ国王が軍を率いて、釈迦族の力ピラ城へ向つとお聞きになつた釈尊は、城に通ずる街道にある一本の枯れ木の下で端座し王を待ちました。王は「世尊よ、ほかに繁つた木があるのに、なぜ枯れ木にお座りか？」と尋ねると、「王よ、親族の陰は涼しい」と答えられました。

王は、釈尊の意中を察し、軍を引き返させました。

同じことが三度繰り返されたといえます。しかし、四度目には「釈迦族の宿縁は熟した。報いを受けねばならぬ」といい、滅びを受け容れられたといのです。

ここで、釈尊が宿縁といわれたのは、コーサラ国前王の代に、その妃を釈迦族から迎えるために遣わした使者が、横柄であつたことに憤慨して、ある長者が下女に産ませた娘を、長者の娘として嫁入りさせたという経緯があつたことを指します。

この因果応報の考え方は、過去・現在・未来すべてを見極めた上で、それが、受け容れ難いものであつても、受け容れるべきは受け入れる覚悟を持つということだと思ひます。そしてその覚悟の後には、「天下和順」を祈願するのみであります。

◎退屈たくくつ

現在でこそこの語は、何もするところがなく暇をもてあまし、出てくるものといえはあくびくらの飽き飽きした心の状態を指す。努力や向上心とは、まるで逆のマイナスイメージだけしか浮かび上がってこない。

しかしこの語は、もともとは積極的なニュアンスを示す語でもあった。つまり、仏道を求めるのに疲れ果て、心が後退し、困難に屈する、という状態を表すものだったのである。いわば挫折せつせつといつてもいいだろう。対象のあまりの強大さに圧倒され、へこたれてしまったのである。

今月の一言

苦しいことから逃げてみると楽しいことから遠ざかる

人間、いったんへこたれてしまつと、

次に到達するのは嫌気の世界である。

何をやっても駄目だとはばかり、心がだれてしまつ。そして行き着く先が何もすることがない「退屈」の世界だ。しかし、我々現代人は、何の努力もせず、最初から退屈世界へ浸り込んでしまっている。自分の将来が見えてしまつという安定成長の社会では、退屈は避けざるをえないのだからか？

時代劇のヒーローに、旗本退屈男せおとめおんどのすけの早乙女主水之介さおとめもんどすけがいる。しかし彼は退屈しつくしたあげくに、行動を起している。となれば退屈の行きつく果ては、積極行動とでもなるのだろうか？ (仏教のことは「ひろさちや監修」)

雑記

▼御忌会



朝顔の双葉

豊田市の浄土宗鎮西派の住職

である義兄が、京都の大本山知恩寺(百万遍)で、昨年の震災で延期になっていた宗祖八百回大遠忌が厳修され、右導師という大役を務めるというので、私も随喜させていたきました。参詣者全員が、大きな数珠を繰りながら念仏を唱えるという独特な法要で、ありがたかつたであります。

●御祖師おんそしの御眼おんめは遙はるか御忌会ごよきえかな  
●御忌法会ごよきほうえ肩かたに重たし遺品いひん袈裟けさ  
●法然忌ほにんぎ八百余年はちひゃくねんそして今 沐魚ぼくぎょ

▼あさがお

去年、孫が幼稚園で朝顔をもらってきて、花が終わった後に、種を採っておきました。そのことをすっかり忘れていたのですが、机の整理をしていたらひよっこり出てきて、遅ればせながら、庭に植えてあげました。

◆朝顔や背伸びせのびしいく苗四本 沐魚